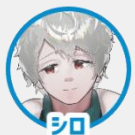


目を覚ます。

汚れた自分の部屋を見渡すと、そこにはシロが立っていた。

シロはまるで何事もなかったかのように、私に微笑みかけた。



「おはよう。よく眠れたかな」

私はかけていた布団を脇に避けると、シロに返事した。



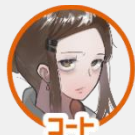
「お陰様でな。それはぐっすりだったよ」

コートは冷蔵庫を開けると、冷えた缶ビールを手を取った。

視界の端で表情が曇るシロを捉えながらプルタブを片手で開ける。

だぶだぶだぶ。

黄金色とも称される液体をシンクに流し捨てながら、コートはシロを顧みた。



「なんだよ」



「あ、いや、なんか思ったよりすぐ行動に移したからさ……」

困惑するシロに、コートは鼻を鳴らした。



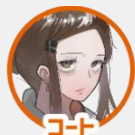
「はん、またシロを無駄に心配させて変なことをされても困るしな」

くしゃり。

コートは缶を潰すと、カーテンを開けて錆びたアルミ枠の窓を開けた。

風が部屋の中へと吹きこんで、よどんだ空気を攫って部屋の外へと連れていく。

空気と共に心が洗われていくような感覚を感じながら、コートは目を瞑った。



「生きる、か」

それは何気なく、口から洩れた呟きであった。

ただ、言葉が産んだ緩やかな決意がじんわりと、自分の中へと漲った。

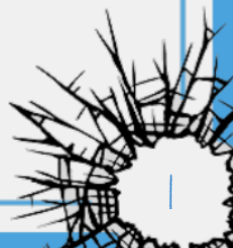
そうして目を開けると、夜空には暗闇が一面に広がっていた。

そうか。今は夜だったのか。

生活習慣の乱れを感じながら窓の縁に寄りかかり、夜の星へと想いを馳せる。

宇宙にはたくさんの星がある。

夜空に光るきらめきのどれかに、フードはきっといるのだろう。



ただ、あの日にお祭<sup>ひ</sup>り会場<sup>まつ</sup>で見た星<sup>かいじょう</sup>とは違って、都会<sup>み</sup>から見<sup>ほし</sup>る星<sup>ちが</sup>は全然<sup>とかい</sup>光<sup>み</sup>っていなかった。  
そんな星<sup>ほし</sup>にコートは口角<sup>こうかく</sup>を少し上げると、安堵<sup>あんど</sup>した。  
私<sup>わたし</sup>からも星<sup>ほし</sup>の姿<sup>すがた</sup>がよく見えないのであれば、星<sup>ほし</sup>からも私<sup>わたし</sup>のことはよく見えないだろう。

鼻<sup>はな</sup>の頭<sup>あたま</sup>が痛<sup>いた</sup>くなる。

目頭<sup>めがしら</sup>が熱<sup>あつ</sup>くなる。

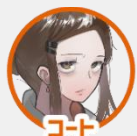
頬<sup>ほほ</sup>を涙<sup>なみだ</sup>が流<sup>なが</sup>れていく。

私<sup>わたし</sup>はすすり泣<sup>な</sup>きしながら、上<sup>うへ</sup>を向<sup>む</sup>き、夜空<sup>よぞら</sup>に向<sup>む</sup>かって中指<sup>なかゆび</sup>を立てた。

それは自分<sup>じぶん</sup>を置いていったフド<sup>お</sup>への怒<sup>いか</sup>りでもあり、  
彼女<sup>かのじょ</sup>をいたずらに虐<sup>いじ</sup>めたこの世界<sup>せかい</sup>への怒<sup>いか</sup>りでもあり、  
彼女<sup>かのじょ</sup>の救<sup>すく</sup>いになれなかった自分<sup>じぶん</sup>自身<sup>じしん</sup>への怒<sup>いか</sup>りでもあり、  
自分<sup>じぶん</sup>だけ先<sup>さき</sup>へと進<sup>すす</sup>む覚悟<sup>かくご</sup>でもあった。

くたばれよ。

それだけ<sup>い</sup>を言<sup>あみど</sup>ってコートは網戸<sup>と</sup>を閉<sup>と</sup>じると、部屋<sup>へ</sup>の掃<sup>や</sup>除<sup>そうじ</sup>に戻<sup>もと</sup>ることにした。



コート

「お前<sup>まえ</sup>も手<sup>て</sup>伝<sup>で</sup>えよ」



シロ

「出<sup>で</sup>来るならやるけどね……」

そんなくだらないやり取り<sup>と</sup>をしながら、片付<sup>かたづ</sup>けを進<sup>すす</sup>める。  
気付<sup>きづ</sup>けばシロはそんなコート<sup>なが</sup>を眺<sup>なが</sup>めながら壁<sup>かべ</sup>にもたれかかっていた。  
彼<sup>かれ</sup>の口<sup>くち</sup>からは歌<sup>うた</sup>が漏<sup>も</sup>れている。  
何<sup>なに</sup>の歌<sup>うた</sup>を歌<sup>うた</sup>っているんだろうか。  
そう思<sup>おも</sup>ったコート<sup>しんちゅう</sup>の心<sup>こころ</sup>中<sup>なかに</sup>を察<sup>さつ</sup>してか、



シロ

「キミが一人<sup>ひとり</sup>でも、寂<sup>さみ</sup>しくないように作<sup>つく</sup>った歌<sup>うた</sup>さ」

そうい<sup>な</sup>うとシロは立<sup>あ</sup>ち上<sup>あ</sup>がり、網戸<sup>あみど</sup>のほうへと近<sup>ちか</sup>づいた。



シロ

「別<sup>べつ</sup>に、たいした歌<sup>かし</sup>詞<sup>し</sup>があるわけでもないんだけどさ」

キミを想<sup>おも</sup>って、大<sup>たい</sup>切<sup>せつ</sup>に書<sup>か</sup>いたんだ。

そうい<sup>は</sup>うとシロは恥<sup>は</sup>ずかしがりながらも、さっきよりも大<sup>おお</sup>きい声<sup>こゑ</sup>で歌<sup>うた</sup>を口<sup>くち</sup>ずさみだした。

シロの歌<sup>うた</sup>声<sup>こゑ</sup>が夜<sup>よる</sup>に溶<sup>と</sup>けていく。

想<sup>おも</sup>いや覚<sup>かく</sup>悟<sup>ご</sup>を混<sup>ま</sup>ぜた一日<sup>いちにち</sup>の終<sup>お</sup>わりに、ゆっく<sup>と</sup>りと溶<sup>と</sup>けていくのであった。

